

第2回藤岡市地域コミュニティ活性化に関する懇話会 概要

日時：令和3年7月9日（金）15：30 から 17：20 まで

場所：市役所中庁舎3階 大会議室

1.開会（司会：地域づくり課長）

2.議題（議事進行：熊倉会長）

（1）市民アンケートの集計結果について【事務局から説明】

※令和3年4月1日を基準とし、住民基本台帳へ登録のある市民から無作為に2,000人の方を抽出し、そのうち786人の方から回答がありました。アンケートの結果は市HPで広く周知いたします。

熊倉会長：これだけ膨大な質問のあるアンケートに、よく4割近くの方が回答してくださったなと感心しました。普通市民アンケートの回答率は3割前後程度が大半なので、かなり高い回答率だと思います。それだけ市民の方の意見を反映した密度の濃い内容になっているのではないかと思います。

委員Cさん：とても良い事なので、できれば市民アンケートを発送する前にHPでこういったアンケートを行うことを知らせて、意見を言いたい人も回答できるように、幅広く意見を聞いた方が良かったのではないかと思います。

熊倉会長：ご意見として市は受け止めて下さい。傾向を示すために敢えて無作為でということだと思いますので、これに対してどんな意見があるかと言うことを皆さんで議論していくのが良いと思います。

委員Gさん：市民の方へこのアンケートを発送する際に、アンケートの趣旨やねらいについての説明はあったのですか？

事務局：アンケート用紙に通知文（送付状）をつけ、その中で「市民の皆様へ地域コミュニティや地域活動への関わり方、まちづくりに関する意識を把握するためにアンケートを実施し、市民と行政の協働によるまちづくりを進めていく上での基礎資料として活用させていただく」旨を説明しております。

熊倉会長：無作為抽出したアンケート結果と合わせ本懇話会で出た意見をもとに、最後に提言をまとめあげていきたいと思います。

委員Fさん：3番目のところに公民館の活用に関する項目がありますが、公民館を地域づくりの拠点としていきたいと考えているという理解でよろしいでしょうか？

事務局：コミュニティをどう捉えるのかというところで、いわゆる共助・自助を考えた時に、行政区がいいのか、地区がいいのか…と色々考えた中で、ある程度地区単位をコミュニティとして考えていく方が良いと思い公民館ぐらいのコミュニティ単位を想定して設問をつくりました。

熊倉会長：強引に公民館を拠点としようという訳ではなく、ある程度地区単位にした方が考えやすいのではないかとこのところで、公民館としたのではないのでしょうか。むしろ集会場とか公会堂とかを単位とした場合にはまた違った数字が出てきたと思います。もしかすると、このアンケートに「地域コミュニティと言った時にどんなものを想像しますか？」といった根本的な質問があれば良かったかもしれませんね。

委員 E さん：公民館を利用していない人がこんなにも多い事に驚きました。もっとアピールしないといけないなと思いました。

委員 A さん：問 7 で地域の人々の「つながり」や「まとまり」が薄れてきていると考える理由を、自由記述で書いてもらおうと良かったのではないかと思います。

熊倉会長：自由記述で書いていただくのも良いと思いますし、この懇話会の中で議論するという必要だと思います。

(2) 地域団体及び地域コミュニティ活動の現状・課題について【意見交換】

※委員の方々から事前に提出していただいた意見書をもとに、補足説明や他の委員の方への質問を行いました。

委員 A さん：端的に言うと、団体活動をする中で一番大きな課題は広報による周知です。周知が足りないか、あるいはやってはいるけれども伝わっていないというのが現状かと思います。解決策としては、世代によるメディアのミスマッチ（紙が良い、HP が良い、Instagram や YouTube が良いなど、人によって望む媒体が様々）を考えた周知です。広報に載せて配っただけでは伝わらないと言うことが明白になってきたので、違った周知の仕方を考える必要があると思います。また、地域活動に携わる中での課題としては、やはり後継者の確保です。新しい会員を増やすのはとても難しく、一回できたグループというのは絆が強くて、なかなかその中に入っていけない。もともとあるグループに入るのには難しいので、別に若い人のグループを作り、もともとあったグループと合同企画で一緒に活動すれば交流が進むのではないかと考えています。

熊倉会長：後者の質問はよく受ける質問でして、団体の方が誰も入ってくれないとよく嘆いています。でも、彼らの活動を奥さんや子どもがちゃんと見ている訳なので、一緒に似たような活動をしているのだからそれで見て伝わっていけばいいんじゃないかと思います。広報の手段については、どう多様性を確保できるかと言うのは予算の関係もあるかと思いますが、良く考えていかないとはいけませんね。

委員 B さん：（本日仕事で欠席のため、事務局が説明）

熊倉会長：防災の事を考えると消防団は軸中の軸ですので、消防団員のなり手がいないと言うのは大きな課題ですね。皆さん防災について意識が高いというか「何とかして欲しい」という気持ちが強いと思うので、それをどうつないでいくかと言うの

は知恵の出しそうですね。

委員 C さん：昔は公民館で村議会が開かれていたり、公民館にまちの行政機能のようなものがあつた。それが今、公民館と言うとサークルや趣味の集まりに興味を持った人が集まるだけになってしまつて、他の人からすると集まる必要性を感じていないのだと思う。昔は美九里だとか平井は、公民館を中心とした行政的な集まり（老人クラブや婦人会など）が色々あつて、それぞれの地区でまとまりができていた。今は趣味の集まりなどで多彩なグループがあるが、それぞれ別々に動いていてつながりがない状態。花と緑のぐんまづくりでは色々なグループが参加していたが、それぞれの縦のつながりだけでなく横のつながりがうまくできるようにしないと、それぞれ単独の活動で終わってしまう。市のサイクリングフェスタや蚕マラソンなど全国的に人が集まるイベントについて、一部の人だけでなく色々な小さな団体が参加できるように年間の中で考えていく必要があるのではないのでしょうか。

熊倉会長：次回に先進地事例として、身近で公民館単位や明治合併の時の旧村単位で諸団体が集まつて地域づくりに取り組み始めているところがありますので、そちらをご紹介します。

委員 D さん：団体の 1 番の課題としては、会員数の減少です。要因としては色々な社会情勢が考えられますが、70 代・80 代はまだまだ現役の農家やゴルファーでございいますので、農業は機械化が進み何歳まででもできるようになり、ゴルフは平日に低額で出来るということで、老人クラブに入ろうという方が少なくなっているのではないかと思います。そうは言っても、市民アンケートの中に「地域の人に声をかけられて（参加した）」との意見が多かつたように、一声かけることで参加を呼び掛けていきたいと考えております。

また、地区の活動についてですが、私の住む平井地区では「コロナ禍の中で何ができるのか？」と考えた中で、平井公民館の向かい側の荒れ地を花壇に変える取り組みを行いました。始めは老人クラブだけで草刈り機を使って頑張つていましたが、その内にその様子を見ていた地域の方々が手助けしてくれるようになり、道具を持っている人、機械を持っている人が声をかけてくださつて、みんなに手伝ってもらい花壇が完成しました。せっかくこのようなコミュニティができたので、花壇ができた後に草むしりの日を決めて、毎月 1 日と 15 日に会員でない方も入れて 30 人程集まつております。その中で「お茶ぐらい出せたらいいね」という声も出ておまして…。そこで考えたのですが、例えば「藤岡市地域コミュニティの日」なるものをつくり、毎月 1 日と 15 日は公民館で誰でも気軽に集まれるような催しやカフェなどを開催したらどうでしょうか。市の方で助成金がいただけるようなら、白石の老人会で公民館を日中だけでも開けてお茶を沸かしておこうかと考えているところです。

熊倉会長：花と緑の活動が次の活動へ継続している良い例ですね。活動を定着させるにはどうしたらいいのかという意味で大変良いお話をありがとうございました。

委員 E さん：広報・周知を積極的に行って、一人一人が社会に関わっていくことが必要だと思います。

委員 F さん：「活性化をしていく」ということを考えた時に、言い方が難しくなってしまうのですが…地域自身の課題を解決する力が弱まっているのではないかと感じています。じゃあどうするのかと言うことですが、市全体、地区全体で何かするというのはやはり難しいので、地域にある課題に対して関係団体の他に興味を持っている人がいかに参加して、課題解決に向かっていけるような仕組みや取り組みを始めていくかということが大事なのではないかと思っています。そのためには日々の人と人とのつながりがどうしても必要になってくるし、地域で解決する力を養うには小さい頃から地域に関わっていることが大切なのです。そのための条件として情報発信が非常に大事になってくる訳ですが、例えば私たちの団体は高齢者が多いため情報発信が非常に難しく、ペーパーなどのアナログな発信となってしまうためなかなか伝えきれいていません。そういった情報発信を、地域ができるのだろうか？あるいは団体ができるのだろうか？何か手段があるのだろうか？例えば公民館などでフォローしてもらえるのだろうか？私も授業をすることがたまにあるのですが、今の子は授業でもメモをとらずに写真を撮っているんですね。そんな状況なので、情報発信については相当発想を変えていかなければならないなと強く感じています。

熊倉会長：地域の力をつけるのもそうですし、多様な形の中でそういった力をうまくつないでいくというのが重要なのかもしれません。地域団体がどこまでできるかと言った時に、市職員も若い人が色々なスキルを持っているので、公民館等に配属される職員のスキルを上げることによって皆さんの活動を支えていくということもあると思うので、地域住民の要望に応えられるようなスキルを持った職員を育成するというのも市の役割なのかもしれません。

委員 G さん：前回コミュニティスクールについて紹介させていただきましたが、学校からすると子ども達に地域（場所）を知る、そこに住んでいる人を知る、そういった方々の活動を知るという学習をしています。その中で 3 世代交流ができ、持続可能な無理なく続けていけるような活動を考えています。それと各中学校区でコミュニティスクールを立ち上げる際に地域の方からボランティア募ったのですが、そのボランティアの集いがあって、そこでお互いの顔を知り「自分はこんな活動をしています、地域に関わっています」と自己紹介してお互いの活動を知ること、そこで横のつながりができるようなんですね。そういったつながりが必要なんだと思います。また、平井小の 2 年生がまち探検ということで公民館

の主事さんに色々お話を聞いたのですが、一番の仕事はサークル活動の支援ということでした。地域コミュニティのことを考えた時に、今後は公民館で地域の様々な団体の活動をつなぐような役割があればいいのではないかなと感じました。あと情報発信というところで、市の広報で小中学校を紹介するスペースがあるが、そこに地域団体の紹介も入れてみてはどうでしょうか？

熊倉会長：部活動で様々なスポーツ部や文化部などありますが、学内から地域を社会活動で支えていこうという動きが文科省のはたらきもあって広がっているようです。地域に来てもらうと言うのではなくて、地域と学校が相互に支え合おうという時代になってきているので、学校が地域コミュニティの核にもう一度なっていく時代なのかもしれませんね。

委員 G さん：公民館は大体小学校の近くにあるので、小学校と公民館が連携して公民館でやっている行事を学校でしてみるといいと思う。地域の方が学校に来て例えば家庭科室を使って料理をすとか、そういう事があってもいいと思う。

熊倉会長：防災の時の最後の拠点はやはり学校と公民館になると思いますので、学校と公民館がつながれば色々なことがやりやすくなってくると思います。

委員 H さん：団体の課題としては、役員の担い手不足と活動のマンネリ化です。役員の任期が1年と短く、新しい事を始めるよりは（例年通り）問題なく過ごした方がいいのでは…というのが正直なところだと思います。コミュニティスクールも学校に関わる団体が多すぎて、誰が何をやっているのかPTA会長であっても良く分からない状況です。ただ、地域の方が子ども達のために学校を応援するという理念はすごく素晴らしいと思うので、コミュニティスクールの理念のもとにPTA活動が収れんしていくのが望ましいと考えています。

熊倉会長：各地区でこういった本音の話ができれば、地区のつながりができそうですね。今の学校現場における先生方の忙しさ、厳しさの中で、地域の皆でやらなければ子どもも地域も育たない、存続しない、ということなのかもしれません。

委員 H さん：地域の活動で感じたこととしては、地域の回覧で「清掃活動を行いました」というのが来ましたが、「知っていたら参加したのに」と残念に思うことがあった。あと、若い世代も地域との結びつきは大事だし地域に関わりたいと思っているのにも関わらず、実際に地域の行事に参加した時に、たまにしか会ったことがない地域の声の大きい人達から色々言われて嫌な思いをして、「もうこの地域に関わりたくない」と思ってしまうようなんです。そんなこともあって、億劫に感じてバラバラになってきているのだと思います。

あと、かつてのようなイベントを復活するのではなくて、自分がそこにいる必然性と言うか…自分がそこになきゃというような個人の興味によって結びつく小さな集団がいっぱいある地域の方が束縛されずにいいのではないかと思っています。小さな集団も大きくしていこうとすると代表者や規約を作ったりと難

しい事になるので、大きくする必要はないと思うんです。小さな集まりが沢山あって色々なものが出来上がっていて、その次に段階として、お互いの活動を知ってつながっていけばいいんじゃないかと思っていて、その小さい集団のどこか一つに入っていればよしとする位でいいのではないかと感じています。

熊倉会長：小さな集団が数多くつながっていくというお話でしたが、そうなるとコミュニティスクールとか学校区単位の方がつながりやすいのかもしれないですね。

委員 A さん：藤岡の学校区は地区と言うか旧町村の生活圏に根付いているので、単位としては非常に面白いと思います。

熊倉会長：幸いにも群馬県内で西毛と東毛の比較的小さい市町村はそういった形で地区が残っていて、そこに小学校と公民館がある形が多いようですね。

委員 I さん：団体の活動で課題だと感じていることは、親と子で達成感が得られ、なおかつ地域の活性化につながるイベントが市の協力のもとできたらいいと言う事と、個人情報のお話で参加者の個人情報のやりとりが煩雑なのでそこがどうにかならないかと言う事です。そして広報は若い人はあまり読まないの、Facebook を使ってイベントを宣伝すると良いのではないかと思います。育成会自体がもう少し認識されるにはどうしたら良いか、また地区会議をしても役員や大人との調整がほとんどで、子ども達が何かをやりたいという意見がなかなか入れられない。子どもが主体で、やりたいことに対して大人に力を貸してもらうというのが本来の子ども会だと思うが、子ども達の意見を尊重するのが難しくなっているのかなと感じています。

熊倉会長：子育連は「自分達でいい組織を作っていこう」という意識があって、そこが少し問題を起こしているのかもしれないですね。もう少し PTA と地区の子育連がつながって、さらに学校につながっていくと、より良いのかもしれない。学校の保証のある PTA と違って、大変気の毒ですが子ども会は制度的に学校が関わっていないんですね。校長先生や教頭先生が善意で関わっているだけなので、学校と良く話をしていくといいと思います。

委員 J さん：団体も色々な問題を抱えすぎていると言うか…問題に関わらざるを得ない訳ですが、よくよく考えてみるとこの問題の全てとは言わないのですが、かなりの部分について根本となっているのが多世代家庭が崩壊しているという「家庭」に起因しているのではないかと感じています。市民アンケートでも我々が子どもの頃は当たり前だった 3 世代 4 世代家庭がほんのわずかになっていることが分かるし、(家庭を) コミュニティという人と人とのつながりと考えた時に、そのつながりが薄れてきているのではないかなと思いました。アンケートから感じたことは、地域コミュニティの必要性を感じているということで、皆さん問題意識は感じていて何とかしなければならぬと思っらっしゃる方が多いのが事実だと思います。ですので、つながりを復活とは言わないまでも、今の世代に合

った新しい形のコミュニティを考えていくのがいいのではないかと思います。
また、喫緊の課題となっているのが、高齢の親が一人ないし夫婦で障害児をみているという実態がある中で、親に何かあった時に障害児はどうなってしまうのだろうと言う切実な問題があります。それを昨年度、市の職員の方にご協力をいただいて市内の福祉施設の団体にも協力をいただき、親や支えている人にもしもの事があった場合、(障害児を) 施設で受け入れてもらえることになりました。コミュニティスクールもそうですが、何か新しい事をやる時にやはり「仕掛け」が必要だなと感じております。その仕掛けのキーとして、公民館や公会堂を活かすことで縦のつながりや横のつながり、大きなつながりや小さなつながりを結んでいくという手があるのかなと思います。

熊倉会長：常々思っていたのですが、障害を持ってらっしゃる方々で、支援学校に行っても18歳を過ぎてしまうと実は行き場がないという問題がありますが…そのことについて実際はいかがですか？

委員Jさん：私が協議会に入った時に一番最初に感じたのは、生まれた赤ちゃんが障害児と分かった時から、幼稚園・小学生・中学生・高校生と、各ステップの中で藤岡市はつながりのある支援ができているのでしょうかと素朴な疑問を投げかけたことがあった。それは色々な方の協力でだいぶ改善されてきているのですが、一番のキーは生涯支援窓口と、就労支援窓口と、青年後の体制づくりだと思うのです。その内の一つが、先程お話した親亡き後に残された障害児をどうするのかという問題なのです。

委員Kさん：この懇話会に今回初めて参加した印象ですが、この懇話会と地域支え合い協議体は中身が一緒のような気がしています。この(支え合い協議体の)事業は厚生省(国)から県に来て、県から市に来て、市(介護高齢課)から社会福祉協議会へ委託されて、それで社会福祉協議会が中心となって地域支え合い協議体を作り上げました。藤岡市の地区ごとに協議体を立ち上げたのですが、その際に市と平井地区とのボタンのかけ違いがありまして…。国の政策は、ボランティアとしてやって欲しいということだったようなのです。新井市長になってから予算をいくらか付けてもらえるようになりましたが、それまでは市の予算がゼロでした。そんなこともあり少しずつ進めているところですが、一番の問題はやはり周知で、6年経っても支え合い協議体の事をいまだに市民が知らないんです。藤岡地区に20区ある中で4～5区にアンケートをとって周知するようにしました。知らないところにいくら言ってみたとこで何にもならないと思うので、やはり周知が重要だと思うんですね。市がバックアップしてくれるんだなということを感じたので、大きな進歩だなと思いました。

熊倉会長：支え合い協議体のボタンのかけ違いのわだちを踏まないように、という事ですね。

委員Lさん：団体の課題としては、会員の高齢化と若い方の加入が少ないことです。ただ、

若い方は他のボランティアをしているから、ボランティア協議会の団体の方には入らないのかもしれないなと感じました。私は藤岡市出身ではなく、会員の方もほとんど藤岡市に越してきた人ばかりなんですね。もちろん自分が何かの役に立ちたいというのがありますが、藤岡市でお友達を作りたいという気持ちもあって皆さんボランティア協議会に入って下さったようです。地域で感じていることは、特に高齢で転入してきた方は馴染めず孤立しがちなので、近所の方が声を掛けて仲良くなってあげるといいのかなと思っています。これからは会員を待ってるだけではなく、「こういう活動をしているので是非見に来てください」と自分達から発信して投げかけていかないといけないなと感じております。

熊倉会長：小さな活動がつながっていくという話と同じように、しっかりした団体があるとかえってその中に入っていくのは難しいので、そこをうまくつないでいく必要があるのかもしれないですね。

委員Mさん：皆さんのお話を聞いていて地域コミュニティに新しい機能を求めているんだなと感じました。幅広い人々の語り合いの中で、負担を少なくしつつ取り組んでいく必要があると思います。また、周知・広報について多くの意見が出ていましたが、これが非常に難しい課題だと思います。「どういう周知をどういう手段でしていったら本当に伝わるのか」というのは、コロナ禍においても、コロナ禍が明けても本当に難しい問題ですね。

熊倉会長：県も色々な活動を本体の方で情報発信のバックアップをしていますが、発信しているけど残念ながら伝っていないというのがあるかもしれませんね。これからの自治体職員は、伝えることに関するスキルアップが求められますね。法制度をどう運用していくかということよりも、市民同士の情報のつながりを県や市の職員がどう上手くできるか、そのスキルがないと地域がまとまらないと思います。

委員 N さん：地域活動の中で最大の課題は、マンパワー不足、地域社会への愛着の低下だと思っています。地域社会への愛着の低下から、自己中心的な生活から脱却できないというのが現状なのだろうと思います。価値観の多様化やプライバシーの問題など様々ありますが、マンパワー不足で若い世代の協力が得難いということから、結果的には高齢の方に偏ってしまうのではないかと思います。一番身近な問題としては、区の班長のなり手がいないという事です。市の条例で定めている健康推進員や交通指導員でさえ、十数人と頼んでやっと引き受けてもらうという現状があります。今回の意見書を提出するにあたり、色々な区長へ意見をお願いしたところ市へ直接出してくれた方もいたので、参考までに見ていただければと思います。区長会も皆さんの貴重なご意見を参考にしながら取り入れていけたらというふうに思っております。

熊倉会長：皆さんの活発なご意見をありがとうございました。このご意見を一度事務局の方

で整理してまとめ、みなさんにお返しして、改めて第 3 回の意見書の提出をお願いしたいと思います。今まで先行事例というと遠いところの話ですとか国が出す事例でしたが、もっと近くで動き出している事例がありますので、そのお話を市の方でしていただければと思います。場合によってはその自治体に来ていただいてお話を聞き、意見交換をするということも考えています。

3.その他（司会：地域づくり課長）

- ・ 第 3 回懇話会の日時と内容について連絡
- ・（第 3 回用）意見書の提出依頼（※8/6 提出期限）

4.閉会